
アトランティスへ ～To is Atlantis～

ヘラクレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アトランティスへく To is Atlantis

【Nコード】

N9542S

【作者名】

ヘラクレス

【あらすじ】

突如、田舎から招集されたヘラクレス。アトランティスを救うため、神々も動き出す…

選ばれし少年より

サクレド「プラケ」(Sacred place)通りを、ゴムのようにキツイ服を着た女性が歩いていった。黒い服に白い肌は不気味なまでに恐ろしかった。女性は冷たい瞳に藍色のアイシャドーを塗っていた。口紅も深い赤で、恐ろしい。サクレド「プラケ」通りは雷に見舞われた。雨は降っていない。通常は雲の水分が擦れて雷が落ちるのだが、そうではなく、ただ単に雷が堕ちているらしい。

女性はヒールの音で通り中をより冷たい空気に行っていた。コツコツという音を響かせながら。何人かは外が気になりカーテンを開けたが、その一刹那、ギロリと睨まれ再び暖かい家庭に戻るのだ。ガス灯のように暖かい光が漏れている。女性は思いにふけりながら、通りの一番奥を目指した。セント・ネプチューン学園では、「お化け屋敷」と歌われる屋敷には「？」の形の鉄柵があった。

? Hall of Poseidon?

と書かれた鉄柵を彼女は開けなかった。でも彼女はそのまま進んだ。たまたまカーテンを開けていたガードル婦人も倒れてしまったのではないか。鉄柵を通り抜けたのだ。長い玄関までの道。レンガの道とその周りの庭は、悲しくも人間を吊っているようだった。

「ポセイドン。ポセイドン！　たく、人を雑用に使っておいて。」

女性は玄関の扉を無理やりこじ開け中に入った。キッチンと階段とリビングへ3つの道があり、リビングへ向かった。フローリングの目の通りに進むと、暖炉があった。寂れた館でそこだけは炎が燃え盛っていた。

「私は雑用に使った覚えはないがな。」

声の主は暖炉のなかから現れた。火の粉の一つがリビングの中央へ富んでゆき徐々に大きくなるや刹那、ギリシャ神話のような白い布を来た人物が現れた。

「あーら。今頃、オリンポスにいるって聞いたけど。」

「お前が呼ぶから飛び出してきたんだ。」

「それにしても…炎の中から登場とは…海神ポセイドンは何処？」
ポセイドンという男性は呆れたような顔で玄関へ向かった。

「情報は。」

ポセイドンが聞いた。しかし女性は答えようとはせず、ポセイドンの後について行った。階段の直前で止まった。

「情報は？」

女性はため息をついた。

「わかってるんだろ。神様だものね。そうね、上々よ。情報源はあいつから。」

「計画通りだな。」

「ええ。」

再び階段を登り始めた。13段登ると180度周り次の階段に変わった。既に8階くらいだろうか。すると8階にエレベーターが現れた。漆喰の暗い部屋には似合わない木製の枠。そこにはめられた同じく木製のボタン。それをポセイドンは押した。そのとき。雷が堕ちた。

「手加減してやんな。」

「ゼウスに言ってくれ。」

少しポセイドンは呆れたようだ。それと同時に電子レンジを彷彿とされるようなチーンという音が鳴った。すぐにエレベーターの扉が開いた。普通の中世に作らせたようなエレベーターには絵が飾ってあった。暴君が処刑されている様子だ。

「ネメシスには行っておこう。悪趣味だとね。」

「ネメシスに言っただって無駄なんじゃないの？だって、オリンポスには居ないものね。」

ポセイドンは頷いてエレベーターに乗った。

「さあて。」

そういうと女性は絵画の額を外し、留め具を据えて外す。すると一枚、紙が挟まっていた。

「連署よ。集まったようね。」

「そうだいいが。」

羊皮紙にはそうそうたる神々の名前が書かれていた。

ふたたびチーンと鳴ると扉が開き、ろうそくによって灯されている縦長の机があった。そしてそこにも、ポセイドンと同じように左肩を出して、右肩から左脇に布を流している男性。そして胸のやや上に布があり、肩には布がかぶっていない女性。

ざっと12人は居る。

「ヘカテにポセイドン。やけに遅かったわね。」

「すまない。でもそうそうたる面々だな。座右の銘を並べてみようか。いや、神の二文字を並べようか。」

ポセイドンは当たりを見回した。みんな微笑んでいるようだ。

「すまない。」

一人だけ手を挙げた。

「なんだモルフエウス。」

「ああ。なんでこんなことをしているんだ。」

皆静まり返ったモルフエウスは申し訳なさそうにしている。

「聞いてくれ。今や世界は乱れている。三極神である、わたし、ゼウス、ハデス。もはや人望、いや神望はないだろう。ただし…希望が無いこともない。」

こちらを皆向いている。

「アトラス山脈を支え続けたアトラスに、アトランティスが任された。それと同時にゼウスが天地天柱を行なった。しかし、ハデスはそれと同時に、天海地のくじ引きをやりなおそうと言い出している。無論、認められない。全ての神話を変えてしまうかもしれない…私は予言を聴きにアポロンに会いに行った。すると、『隠された神の子がアトランティスを変え、それは闇へと葬ることになるが、未来には助けにならなくもなかるう。』と言われた。」

「それは…誰かの子供がアトランティスに居る、ということですか？」

「そつだディオニユソス。葡萄で鍛えた知能か？」
皆うつむいた。

「我々は、律法の損なわれた神々に、宣戦を布告する。」
ポセイDONはそう言うのと再びエレベーターに戻るのであつた…

小さな田舎町、ラツチャーから政府の役人が排出された。町長からも握手を求められ応じる16歳程の少年は、アトラスティクスマトルクス号（Atlantischimax）に乗り込み、手を振りながら首都、ポセイDONへと消えていった。

「アルリル。大丈夫。」

「うん。お母さん。」

弁当を食べながら答えた。

「これ。国王謁見の栞。読んでおきなさいよ。」

「うん。そのうち。」

そのうちに摩天楼が見えてきた。バベルの塔のようだ。

「これはポセイDONじゃないわよ。」

お母さんがそう言った。

「ここはヘルセポネルス。まだ3駅も先。でもここで降りるわね。」
「えっ!？」

行かないで、とは言えない。

お母さんは降りていった。ここで降りないと、あんなド田舎にもどるような汽車はないんだそつだ。かわりに男女が乗り込んできた。年齢は同じくらいだろう。四人分のコンパートメントの3人分が埋まつた。

次の駅は少し田舎だつた。セレブ別荘地というあだ名があり、閑静なのでそう感じたのだろう。いくらセレブ別荘地でもありえないような服装の人が乗り込んできた。水色の大きなスカートにフリルが付いていた。貴族のようだ。コンパートメントの扉を閉めるとその隙間を人差し指でなぞつた。おかしい癖だ。

汽車が発してすぐに、その女性は切り出した。

「あなたたち。お名前を伺っても良い？」

三人とも目を見合わせた。

「ミスター……」

僕に聞いている。

「ヘラクレスです、ヘクレスって呼ばれてます。」

「あら、可愛らしいあだ名。あなたはミス……」

女性にも訪ねた。

「ミネルヴァです。」

「あら。まあ。あなたはミスター……」

「ああ、サテルスです。」

「そう。わたしは、アフロディテよ。」

その瞬間、硬直した……ありえない。そんな……。神話に出てくる神と同じだ。どうりで美顔だと思った。

「あなたたちの思うとおり。あの、アフロディテよ。」

「はあ。」

女性は……いやミネルバ（発音が難しい）は、溜息らしき何かを漏らしていた。

僕も信じられなかった。サテルスは扉を開けて外に行こうかと思つた。逃げようとも考えているのだろうか……しかし扉は開かなかった。

「話があつて外に出てもらうわけにはいけないのよ。」

アフロディテは目には見えないような力でサテロスの肩を押した。

「あなたたちに全てがかかっているの。」

うんちくを聞かされるのかと思つた。でも違つた。いきなり、神話の話をしだした。

「あなたたちに、？空想？として語り継がれる神話。それは事実なの。そして今。オリンポスは未曾有の危機を迎えている。それを救えるのがあなたたちなの。あなたたちだけの。近頃、というか今、アトランティスは最盛期を迎えている。アトランティスを創造するとき、オリンポス十二神とビッグスリーは分裂した。ポセイDONは

アトランティス創造推進派。ゼウスはアトランティス創造反対派。そしてハデスは、その長に自分の部下であるアトラスを派遣するのに怒っていた。実際、アトラスはポセイダンのスパイだったんだけど。それが分かっただけからますます怒った。そのせいで、分裂して、戦争が起こりかけてるの。」

「待ってください。そんないきなり話されても。信じられるわけ！」
ミネルバが言った。確かにそうだ。信じられない。

「信じてもらうしかないわ。問答無用で。ポセイダンは反戦派。私もね。でも、どうしようにもないかもしれない。ゼウスは雷霆の訓練を行なって、様々な神にそれを使わせる気にいる。ポセイダンだって海の神。ハデスに至っては死者の軍隊を作ろうとしている。もう、眠ってられないのが現状よ。第一に、ヘラクレス、あなたの街では沢山の雨が降るのに食物が実らない。それはハデスが地中から植物の栄養を吸い取って、死者に分け与えているからよ。」

確かにそうだ。日照りでもないのに食物が実らない。

「どうせなら、ポセイダンにあるポセイダンの館に来て、話でもしていいたら、信じてくれるかしらね。」

悩んだ。話してみたい。そうすれば、万が一これが事実なら、会すべきだと思う……

「私、行きます。」

ミネルバが切り出した。そうだ、僕も！

「僕も……いいですか？」

「ええ。来てください。サテルス君は？」

「じゃあ。」

ということになり、オリンポスの話を聞かせてもらうことにした。しばらくポセイダンには到着しそうなし。

「冥界の話を聞かせてください。」

「ああ。あなたたちが言う冥界とは本当は違うの。準冥界っていうて、死者の行く先ではないのよ。」

そうなのか、と思ったが、少なくともポセイダンに会うまでは本

当かどうか分からない。

「遅いわね。進めちゃおうかしら。一応、ヘカテには借りておいたんだけど…」

懐中時計を手に持った。小さな鎖のような輪を、コンパートメントの入口の取っ手に引っ掛けた。ガラスに手をかざした。するとガラスが無くなっていた。

「この汽車の到着時間って…」

「19分後です。」

サテルスが言った。するとアフロディテは針をそのように合わせた。外をみると摩天楼が見えてきた。これが…ポセイドンだ。

それよりも、19分間も時間を移動したことにもびっくりだったが、摩天楼がそれをなだめさせた。

サクレドⅡプラケ通りに居た。歩いていた。異様だった。水色のセレブ服の女性と、貧乏そうな服の男女3人。異様な組み合わせ。とにかく異様だった。しかし、アフロディテは普通な顔をして歩いている。ほかの人は赤面しているというのに…

サクレドⅡプラケ通りは突き当たりに居た。ポセイドンの館、だそうだ。

「今はビッグスリーの誰とも手を結ばない人が会談に来ているから、そうそうたる面々だとおもうわ。」

そんなようには見えない。ただのお化け屋敷だ。

「入って。」

でも柵があった。入れない。当たり前だ。見えないのだろうか。思いっきりぶつかってやろうと進んでいくと、ぶつからない…通り抜けてしまったようだ。とにかく奥に進むと扉が見えた。振り返ると、サテルスが柵を超えるのに苦戦しているようだ。その時、何かが聞こえてきた。

『忌々しき侵入者よ、立ち去れ!』

「耳を塞いで！」

アフロディテの言う通り、耳を塞いだ。やっとサテルスが柵を超えたらしく、近づいてきた。

「侵入者よけの呪文よ。ごめんなさいね。ヘルメスがやったよの。」
そう言つて扉を開けてくれた。

「レディファーストなんて、戯言よ。」

そう言つて、中に入ると、何も無かつた。

「こつち。」

とりあえず、一番右にある道を進むと、普通のリビングがあつた。暖炉がある。めらめらと燃えている。

「ポセイドンがヘスティアを拉致して造らせたの。ま、そのせいで、二人が仲良くなつただけだね。」

信じられなかつた、というかこんなにあつさりと言われていいものだろうかと悩んだ。嘘の可能性もある。

「後で分かるわ。」

アフロディテは暖炉に飛び込んだ。燃えるつもりなのかは分らないがどこかに消えてしまったのは確かだ。おかしい、あがいてはいない。もしかして！

僕も飛び込んだ。なにもない、無、だつた。死んだのかと思つた。しかしすぐにろうそくの明かりが見えた。アフロディテは神々の一人として机を囲んでいる。ほかの二人もすぐに来た。

右から？アフロディテ？アルテミス？デメテル？ヘルメス？ヘスティア？ディオニユス？アトラス？オケアノス？ヒュペリオン？エリニユス？モイライ？モルフエウス？ヘカテ？まさしくそうそうたる面々。それに加えてポセイドンだろ…まで、これで戦争が起きたら…

ポセイドンが僕たちの前にいた。

「連れてきたわよ。」

アフロディテはそうポセイドンに伝えた。

「見たらわかる。君たちは国王親衛隊に当選した。そうだな。」

「は、はい。」

三人ともそう答えた。と、言うことは、三人とも同じ職場ということか。

「ハデスは地上に軍を差し向けた。気をつける。」

そう言うところポセイドンはすきま風に流され、砂のようになって飛んでいった。気づくと、周りには一人も居ない。

それから王宮に向かった。背は低いが大理石づくりで、色も派手ではないが、悠然とそびえる城に色なんて必要なかった。中央にある入口への道のスタート地点。つまり検問の地点ということになるが、その「キング・スタート・ポイント」に向かうと、これまた大きな検問所が待っていた。???の王冠のマークの柵のゆうに石造りの検問所がある。

「あの、国王親衛隊に当選した者なのですが…」

「ああ。国王は会わないよ。」

全てが真っ白になった。この検問はおかしいのではないか…重要な客人を中に居れないなんて…

「国王は誰とも会わないよ。」

ネームプレートにはジェンソンと書いてあった。

「どうしてですか？」

聞いてみた。

「どうしても何も…ウイルスのせいさ。」

「ウイルス? なにか病気でも。」

「ああ。嘔吐、熱、腹痛とかなあ。細菌研究所によると新種らしいんだが。んで、国王に感染しては行けないんで面会は控えてくれ。」

全てが泡になったような気がした。僕たちを国王から遠ざけたのはウイルスだった…
?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9542s/>

アトランティスへ ~To is Atlantis~

2011年5月3日10時11分発行